

集材トラック「積みマイカー」が走る



定年後、山に目覚める 農家林家が続々誕生

岐阜県「高山市木の駅プロジェクト」

文：編集部

写真：曾田英介

不ぞろいの林地残材や間伐材を相場（1t2000～3000円）より少し高い価格（1t4000～6000円）で買い取り、地元商店だけで使える地域通貨で支払う。——そんな「木の駅プロジェクト」（以下、木の駅）が全国各地で急増中。2009年、岐阜県恵那市での開始を皮切りに、9年で80力以上に広がった。

2014年に始まった「高山市木の駅プロジェクト」もそのひとつ。集材トラックの活躍で山からどんどん木が出るようになり、ただ今絶好調！



赤保木地区のメンバーは、水田1ha、山林2ha程度の定年農家林家が中心。合併で空き地になった森林組合の土場（900m²）をそのまま木の駅に活用した

高山市は2005年に周辺9町村が編入合併し、東京都とほぼ同じ面積になった。旧高山市の赤保木地区は300戸、120haほどの共有林がある



市が委託する集材トラック「積みマイカー」は、市内循環バスの「乗らマイカー」から命名

集

材トラック「積みマイカー」の効率はテキメンだった。2016年5月の運行開始とともに、高山市内には新たに6カ所の土場が誕生。10人だった出荷登録者は60人に増加し、30tだった原木の年間取扱量は500tにまで跳ね上がった。

積みマイカーは、木の駅専用のユニット付き6t車。合併前の旧町村にほぼひとつずつある7カ所の土場を週1回集材して回っては、市内のペレット工場まで運ぶのが役割だ。

「おかげで近くの土場に、誰でも気軽に丸太を持ち込めるようになった。今まで

山に入らなかった人が動き始めたのです」

高山市木の駅プロジェクトの事務局・NPO法人活エネルギーアカデミー代表の山崎昌彦さん(62歳)は語る。

もともと物流や経営改善のコンサルタントが本職の山崎さんは、「高山市の一部で始まっていた木の駅プロジェクトを市内全体に広げるには『集荷システム』が不可欠」と市に提案。話し合いの中では、積みマイカーの運行費用がネックになったが、結局、運送会社への業務委託料を市が全額負担するかたちで実現し、成果はすぐに現われた、というわけだ。

山崎さんに現地を案内していただいた。

